教育みかわ

第144号

副会長挨拶
三教研に望むこと（知立・蒲郡・豊橋支部）
学校自慢（安城支部）
支部トピックス（碧南・新城支部）
教室の窓から（岡崎支部）
私の研究（豊田支部）
研究大会の報告
調査委員会報告
授業力養成講座
教育随想

三河教育研究会　令和7年3月10日

夢中になる姿を求めて

三河教育研究会　副会長　遠　山　祐　幸

三ヶ月程前、最近話題のスマート望遠鏡を操作する機会に恵まれ、下の写真『オリオン大星雲』を撮影しました。一昔前なら光害の少ない山に、数十kgもある機材を運び出し、何時間も震えながらの撮影でした。しかし今回は、わずか三kgの望遠鏡をベランダに置きさえすれば、宙を観なくても天体の導入からピント合わせ、撮影まですべてスマホが行ってくれました。デジタル技術の進歩に驚き感動しました。しかし、リアルなわくわく感はそこにはなく、子どものいない場所でオンライン授業を参観している感覚と同じでした。

また昨年秋、ＮＨＫドラマ「宙わたる教室」にはまりました。原作は、第七十回青少年読書感想文全国コンクール課題図書で、実話に着想を得た小説です。ドラマの舞台は定時制高校科学部。様々な背景をもつ生徒たちに寄りそう藤竹先生の距離感が絶妙で、教師の言動に感化された生徒たちが、年齢も境遇も乗り越え尊重し合いながら、実験室に火星を作ることに夢中になっていく様に魅了されました。

本年度の授業力養成講座では、総合的な学習の時間の助言者である豊橋市立富士見小学校長 羽生あゆみ先生から「子どもの心に火をつける」プロセスについて、また、数学の助言者である愛知教育大学准教授 青山和裕先生から、授業の後半で「まとめるのではなく、ぐちゃぐちゃになることをめざす」終わり方についてご助言がありました。これらは、どちらも子どもをその気にさせ、夢中になって学ばせるための手だてです。

教師の最大の役割は、子どもを「夢中にさせる」こと、そう考えると教師の仕事の魅力と学校の意義が浮かび上がってきます。授業は、いかに子どもたちを対象と出会わせ、夢中にさせて、さらに学びたいと思わせるかが勝負だと考えます。夢中になって学ぶ楽しさを味わった子は、探究した知識・技能を身につけるだけでなく、仲間との探究そのものに喜びを感じ、生活をよりよくしていくでしょう。そのためには、「この子だから、この教材で」という基本に立ち返り、子どもに寄り添いながら教材模索することが肝要になります。デジタル技術が発達し、情報があふれる多様な価値観の時代だからこそ、自分の目で子どもを観続けることを大切にし、リアルな学びのなかでこの子らしさを伸ばしていきたいです。

三教研に望むこと

受け継がれるべき大切なもの

知立市立知立中学校
淵　上　隆　博

本市の教育研究会の発足は、三河教育研究会発足から十年後のことでした。それ以降今日まで連携を密にし、三河教育研究会同様、「会員相互の研修を深め、本市の小中学校教育の充実発展をはかること」を目的とし、進化・発展を遂げてきました。

今年度、私は、本市の教育研究会会報一〇〇号の執筆も依頼されていたため、三年ほど前に作成された本市教育研究会五十周年記念ＤＶＤを開いてみました。その貴重な記録を見ていく中で、発足初年度にあたる昭和四十六年度の各教科部会の研究記録の一部が私の目に留まりました。それは、算数数学部会の報告で、そこには、手書きで次のように記されていました。「まず、本年は、毎時間の授業の中に、新しい概念をどのように取り入れて展開していったらよいか（中略）研究を進めることにした。そのために授業を参観し、参観者は、指導者と同じ所の教材を十分研究し、授業展開の指導案を作成して持ち寄り、自分が指導する立場に立って授業を参観し、研究協議会に臨んでは…」

時代の違い、働き方改革等とは無縁であったとはいえ、我々の先輩方の授業並びに授業研究に寄せた真剣な姿勢と強い意思を感じました。

三河の教育は、こうした我々の先輩方がその道筋を作り、後輩を導くことによって受け継がれてきました。「目の前の子供のために」、「はじめに子供ありき」という考え方は、三河教育の不易な部分であり、この先も大切にされていくものと思います。

これからの社会は、ＩＴやＡＩ時代へと進んでいくことでしょう。よって、そうした時代へ対応できる児童生徒の育成及びＡＩにはできないとされる能力を養うことも大切です。しかし、そのことにとらわれすぎるあまり、目の前にいる子供の存在を忘れてしまったり、「はじめに子供ありき」という考えがおろそかになったりしてはいけません。我々の目の前には、タブレットではなく、子供たちがいることを決して忘れてはいけないのです。

今後、三河教育研究会並びに各市町村研究会には、我々の先輩方の授業並びに授業研究に寄せた真剣な姿勢と強い意思を受け継ぎながら、三河の教育を根底から支えてきたものを大切にし、多くの先生方に自己研鑽に励むことのできる場と環境の提供を期待しています。

ともに磨き合う

蒲郡市立蒲郡北部小学校
藤井克枝

私の専門教科は国語です。小規模の中学校勤務が長かった私は、国語担当の正規教員が自分一人であるという年もありました。同僚と授業について語り合う場がなかなかもてなかった自分にとって、三教研国語部会の夏季研修会は、さまざまな実践を知り、よりよい授業について考えることができる貴重な場でした。

平成二十六年度の研修会では、「話すこと・聞くこと」の分科会で、実践発表をする機会をいただきました。「自分はこんな題材を取り上げた」「こんな手だてもあるのでは」など、自分の視野が広がるご意見を多くいただいたことは、今でも私の宝となっています。さらに、他の先生の実践を知り、自分の授業にも取り入れてみたいと思ったり、新たな取組のヒントをいただいたりし、目の前の子どもたちのためによりよい授業をしたいという意欲がかき立てられました。

また、講演会も毎年楽しみにしています。教科書に掲載されている作品の作者が講師として招かれることが多く、作品に込められた思いを直接聴くことで、教材に対する理解が大いに深まります。

今後も三教研を通して、教育についてともに考え合い、磨き合うことを通して、「子どもを中心に据えた教育」がさらに推進されることを願っています。

『子供ありき』の教育

豊橋市立羽田中学校
戸苅敦志

「目の前にいる生徒にあなたはどうなってほしいの？」

まだ新任だった頃、授業案の作成で悩んでいたときに同僚の先生から言われた言葉です。自分のやりたいことを優先した授業を構想していた私に、授業を通して生徒に何を身につけさせたいのか、きちんと目標を立て単元や授業を構想していくことの大切さに気づかせてくれた一言でした。今思い返すと、三河教育の特色である『はじめに子供ありき』という考え方を、新任だった私に教えてくださったのだと思います。

今年度、三教研技術・家庭部会（中）の地区委員を務めることとなりました。豊橋だけでなく、他の三河地区の先生方とのつながりができました。それだけでも私の財産となりました。その縁で、他の三河地区の授業研究会に参加させていただき勉強する機会がありました。三河教育研究会という組織のおかげで、それぞれの地区が共通のテーマで研鑽を積むことができ、教員の授業力の向上とともに、子供たちの学びへとつながっていると感じました。先輩方から教えていただいた『子供ありき』の考え方を、引き継いでいきたいと思います。

学校自慢

日本語で学ぶ楽しさを

安城市立祥南小学校

本校には、全校児童の約二割にあたる五十五名の外国人児童が在籍しています。そのため、日本語教育が必要な児童に対して日本語適応指導教室で、日本語の学習や教科の個別学習を行っています。

また、個別学習だけではなく、友達と関わり、学び合いを通して日本語学習を進めていくため「わくわく日本語タイム」と称して、グループ学習も行っています。例えば、高学年では、地域や社会のことを知り、読み書きの力を高めるために、グループごとにテーマを決めて、新聞切り抜き作品作りに取り組んでいます。外国人児童にとって、日本の新聞は馴染みがなく、漢字も多く難しいですが、「安城市の七夕祭りに、こんなにたくさんの人が来ているとは知らなかった。」「介助犬という犬がいるんだね。」など、新しい発見があり、どの児童も意欲的に学習に取り組んでいます。

今年度は初めて、同じように日本語適応指導教室で新聞切り抜き作品を作っている市内の小学校とオンラインで作品発表会を行いました。グループごとに、分かったことや工夫したところを伝え合いました。「緊張したけれど、伝えたいことを発表できた。楽しかった。」と感想を話し、他校との交流を通して話す力をつけることができ、児童の大きな自信となりました。

また、完成した作品は、懇談会期間に掲示し、保護者や全校児童にも披露しています。その際に、「すごいね、どうやって作ったの。」と級友や担任から声をかけてもらい、児童の達成感につながりました。本校では、学校全体で外国人児童を温かく支援し、国の垣根を越えて、誰もが笑顔で生き生きと学習できる環境づくりに取り組んでいます。

他校とオンラインで発表会をする児童

（文責・久野　真美）

支部トピックス

碧南支部

将来にわたって地域を支える生徒の育成

～小学生へつなげる地域ボランティア活動を通して～

碧南市立東中学校

碧南市は、小学校七校、中学校五校の市です。小学校区ごとに公民館が設置され、青少年の育成を目的とした行事が年間を通して開催され、中学生がボランティアとして活動しています。また、碧南市が企画する行事にも、各中学校から多くの生徒ボランティアとして参加をしています。

本校の学区には、二つの小学校があり、それぞれの小学校区の公民館活動がとても盛んです。各青少年育成推進委員会が、青少年の育成を目的として行事の企画・運営をし、中学生ボランティアがその活動の一翼を担っています。そして「公民館まつり」「昔の遊びあれこれ」「ふれあいレクリエーション大会」など、両公民館でのボランティア活動を十年以上も継続しています。

これらの公民館主催行事の特徴として、小学生とその家族を対象としたものが多く、中学生ボランティアの活動を、小学生時代から参加者として見てきた子供たちが、中学生になり今度はボランティアとして参加するサイクルが自然と出来上がっています。

その活動を支援するのが、学区の大人だったり、中学生の保護者や家族だったりします。あと十年もすれば、中学生ボランティアを経験した生徒たちが親となり、参加者の小学生を伴って各公民館の行事に参加することでしょう。そして中学生とともに、地域の担い手となっていくと思います。

また、本校には、学区の複合施設や保育園をはじめ、市民祭りや環境イベントなど、年間十五件以上のボランティアの要請が来ます。

これらの活動を通して、自主的に活動できる力を育て、将来、地域社会のために活動できる大人へと成長していってほしいと願い、生徒を育てていきたいと思います。

（文責・小澤　徹）

小学生に説明する中学生ボランティア

新城支部

市内統一型新制服　今春導入　検討委員会の奮闘

新城市立全中学校

「なんでスカートじゃないといけないの。スカートじゃなくてズボンがいい。」

令和四年度、そんな声から、生徒会が中心となって「制服の選択自由化」に動き出した中学校がありました。

このような市内中学校の動き、全国的な制服見直しの状況、世の中の多様性理解の要請、今後の生徒数の推移等から、これからの制服について検討するため、令和五年四月、教育委員会・市内中学校長で「新城市中学校制服検討委員会」を立ち上げました。

生徒や保護者へのアンケートを実施し、その結果を受け、新制服導入目標を令和七年四月に設定しました。期限までに制服が納品されるには、生地の確保が最優先だと考え、まず、いくつかの生地を検討委員会で選定しました。次に、地元販売店推薦の制服製造メーカー数社にサンプル製作を依頼。令和六年一月、各中学校の生徒、保護者代表を新たに交えた「拡大制服検討委員会」を開催し、年度内に、サンプルを検討し、マスターメーカーを選定する予定でした。しかし…。

「代表として参加し、意見を伝えられると思っていたのに、結局、ひかれたレールの上でしか考えさせてもらえないのか？一から自分たちで考えたい。一体、何のための検討委員会？」

提示された生地サンプル、基本のデザイン案から選択するだけだということに失望した生徒や保護者からの声でした。

そこで、拡大検討委員会の中の有志メンバーが、通称「デザイン部」を立ち上げました。デザイン部はタイムリミットぎりぎりまで、当初の予定を超えて検討を重ね、他の委員に思いを伝え、自分たちで市内の全中学生が着る新制服を決定し、キャッチフレーズを作り上げました。

ときに令和六年五月。

『美しく咲き　夢に向かって舞い上がれ』

（文責・鳳来中・吉田　詩朗）

しんしろ軽トラ市で新制服お披露目

教室の窓から

特別支援学級におけるコミュニケーション能力の向上を目指して

―「さくらカフェへようこそ」の実践を通して―

岡崎市立福岡小学校
荻野清史

コミュニケーション能力とは「相手と意思疎通する力」で、自立した社会生活を送るために欠かせないスキルです。しかし、学年や生活経験、発達段階や本人が抱える困難さによって、一人一人大きく異なります。そのため、本校の特別支援学級では、学習を含めた学校生活全般においてその子に合った指導を大切にし、コミュニケーション能力の向上を目指しています。

今年度、担任した学級では、生活単元学習として、お世話になった人に感謝の気持ちを届けるために、子供たちと「さくらカフェ」を開く計画を立てました。指導にあたって工夫したことは、次の二点です。

一点目は、活動の目的を明確にしたことです。「お菓子を作ること」「招待状を書くこと」「教室の飾り付けをすること」「接客をすること」の全てにおいて、何のためにカフェを開くのか、お客さんにどう感じてほしいのかなどについて、子供の実態に応じて、問いかけや助言等を継続的に行いました。子供たちは、ただ相手を意識して活動するだけでなく、考えや願いを口にしたり、自然に子供同士で交流したりして、楽しく和やかな雰囲気で準備を進めることができました。

二点目は、「接客」を練習する場を多く設けたことです。本単元の中で一番コミュニケーション能力を養うことができるのは、来ていただいた人と直接関わるときです。子供たちは、接客の話型を時間をかけて練習しました。しだいに滑らかに話せるようになりました。当日は、話型にとらわれず自分の言葉で接客ができた子、にこやかな表情で動作を付けながら話ができた子、お客さんとの対話を楽しんだ子、それぞれがお礼の気持ちを込めて、生き生きとおもてなしをする素敵なカフェになりました。その様子を見たときには、担任が思い描いていた以上にコミュニケーションがとれていることに驚かされました。子供たちは「感謝が伝えられてよかった。」、「楽しく話ができて嬉しかった」などと振り返りました。

本実践から得られた成果を基に指導の工夫を重ね、良好で豊かなコミュニケーションを築き、自立した生活を送ることのできる福岡っ子を育てていきたいです。

接客に挑戦

私の研究

自分の思いや考えを豊かに表現しようとする子の育成

―小学一年　国語科　かかわり合いながら、言葉を獲得する活動を通して―

豊田市立朝日小学校
倉田麻里

一　はじめに

入学間もない子どもたちは、一人の意見を同じ言葉で繰り返し発表することが多く、語彙力の未熟さを感じました。学習指導要領でも、語彙の量と質を豊かにする語彙指導の充実が必要とされています。そこで、学校生活や他教科での経験から見つけた言葉を蓄積し、その中から自分が表現したい言葉を選び、遣えるようになってほしいと考え、実践に取り組みました。

二　実践

二つの実践を通して、検証を行いました。

一つ目の「ことばあそびうたをつくろう」の実践では、生活科の学習を中心として五感を使いながらオノマトペを引き出す活動を行い、それを「ことばあそびうた」作りで活用しました。これは、オノマトペと名詞を組み合わせてできる簡単な詩のため、どの子も楽しんで作ることができました。できた詩は、言葉のリズムに合わせて手拍子を入れたり、動作化したりして、友達に紹介しました。

でき上がった「ことばあそびうた」をグループで練習

二つ目の「はっけんしたよ」の実践では、虫を観察して見つけた言葉を観察文にしました。五感のそれぞれを五レンジャー（目レンジャー、耳レンジャーなど）と名付けることで観察の観点を示し、色分けした付箋にメモしました。メモの言葉を文にし、文を集めて段落にし、段落を合わせて文章にしました。メモの段階で、大きさを「～ぐらい」、見た目を「～みたい」と例えを入れた表現を知らせることで、より読み手を意識した観察文となりました。

五感を使って集めたオノマトペ

これらの学習を通して、オノマトペをきっかけに、語彙の種類や量を増やすことができ、さらに読み手に伝わる言葉を考える場を設定したことで、語彙の質を高めることができました。

三　おわりに

五感と結び付けて言葉を獲得することは、低学年の子どもたちにとても有効です。教師が意識することで、多くの言葉を身に付け、表現の幅を広げることができると実感しました。今後も自分の思いを伝えられるように、言葉を磨いていく活動を取り入れていきたいです。

研究大会の報告

統計教育

確かなデータにもとづいて　考える力を育てる統計教育

東海・北陸ブロック統計教育
　指導者講習会
兼　愛知県統計教育研究協議会
　研究発表会・講演会
期　日　令和六年八月二十八日(水)
会　場　ウインクあいち
◎研究発表会　提案者
蟹　江・須西小　加賀洋平　先生
豊　橋・章南中　小池正伸　先生
名古屋・栄　小　坂野寛明　先生
名古屋・内山小　森　貴政　先生
名古屋・村雲小　小林篤史　先生
名古屋・猪子石中　水崎翔太　先生
◎指導講評・講演会
講師　愛知教育大学数学教育講座
准教授　青山和裕　先生

愛知教育大学の青山先生から、統計教育の利点を生かすため、統計やデータサイエンスの利活用事例、教材・授業実践を具体的に紹介していただき、それらをもとに社会に求められる人材とそのための統計教育の在り方について講演していただきました。

研究実践では、須西小・加賀先生から、タブレットを用いたアンケート調査を行い、分析・考察を繰り返すことによって、気持ちのよい挨拶とはどんな挨拶かを考察する特別活動の実践、章南中・小池先生から、箱ひげ図を用いて地域で行うウナギの生態調査のデータを分析する数学科の実践、栄小・坂野先生から、児童が資料を自分たちで見つけ、自分たちで調べながら、身の回りの水の利用状況を調査する社会科の実践、内山小・森先生から、レーダーチャートと棒グラフで児童がアンケート結果を可視化しながら学級目標の実現を目ざす特別活動の実践、村雲小・小林先生から、校訓に対する全校児童の意識調査を棒グラフにまとめ、分析した内容を全校に伝える算数科の実践、猪子石中・水崎先生から、電力と熱量の関係について、観察・実験で得たデータをグラフ化して関係性を見いだす理科の実践がそれぞれ提案されました。どの実践も、データをもとに考察する力を育てる子どもの育成を目ざした提案となりました。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

今後の統計教育に向けて

豊橋市立南部中学校　森　大輔

身のまわりにはさまざまなデータがあふれており、大量のデータを収集・分析・活用する力が求められています。統計教育で探究的な問題解決能力を育むために、日常生活や社会などにかかわる疑問をもとに、データの収集方法や統計的な分析結果などを批判的に考察する力の向上を図る授業を実践していきたいです。

令和五・六年度　実践事例集

『新しい時代に求められる教育』

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る授業実践～

調査委員会

調査委員会では、諸事業の推進や充実を図るために二年間ごとに主題を設定し、調査・研究を進めています。令和三年の中央教育審議会答申において、二〇二〇年代を通じてめざす「令和の日本型学校教育」のあり方とともに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させていくことで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図り、子どもたちの資質・能力を育成していく必要性が示されました。

こうした教育の今日的な課題をもとに、三河各地の学校現場の実情を踏まえた調査・研究を行うため、各支部からの意見を踏襲し、昨年度より主題を『新しい時代に求められる教育～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図る授業実践～』と設定し、三河の各支部で実践を行ってきました。そして今年度、各支部における小・中学校の価値ある学校研究や魅力あふれる授業実践を一冊にまとめた事例集として発刊し、すべての学校に送付しました。

事例集に掲載された三十二実践いずれも、目の前の子どもや地域の実態をもとに願いをかけ、仲間とともに生き生きと学ぶ子どもの姿を大切にして実践に取り組まれています。さらに巻頭には、愛知教育大学教授の江島徹郎先生より主題に関連した貴重な提言をいただきました。

事例集として形に残し、各校で積極的に活用していただくことで、私たち自身の資質・能力の向上へと結びつけていくとともに、子どもたちの資質・能力の育成につながっていくことを願っています。

○実践事例掲載校一覧

【小学校】

豊橋市立鷹丘小学校　豊川市立御津南部小学校
蒲郡市立蒲郡東部小学校　新城市立作手小学校
田原市立伊良湖岬小学校　設楽町立津具小学校
岡崎市立六ツ美北部小学校　碧南市立大浜小学校
碧南市立日進小学校　刈谷市立富士松南小学校
豊田市立佐切小学校　安城市立丈山小学校
安城市立桜林小学校　西尾市立寺津小学校
知立市立知立南小学校　高浜市立高取小学校
みよし市立北部小学校　幸田町立豊坂小学校

【中学校】

豊橋市立北部中学校　豊川市立南部中学校
蒲郡市立大塚中学校　新城市立東郷中学校
田原市立東部中学校　東栄町立東栄中学校
岡崎市立北中学校　刈谷市立朝日中学校
豊田市立豊南中学校　西尾市立一色中学校
知立市立竜北中学校　高浜市立高浜中学校
みよし市立南中学校　幸田町立北部中学校

授業力養成講座

～中堅教員のミドルリーダーとしての資質向上をめざして～

授業力養成講座は、ミドルリーダーの育成のため、各校の中堅教員を対象に、授業の在り方や参観の仕方、協議会の進め方などを研修できる機会として、平成二十二年度より開催しています。講座は、講師を招聘し講義形式で進める「授業力養成講座Ⅰ（夏期講座）」と、実際の授業を参観し、授業協議会をとおして授業の在り方を学ぶ「授業力養成講座Ⅱ（秋期講座）」を行いました。

授業力養成講座Ⅰ（夏期講座）

【東三河】
○期　日　八月二十一日（水）
会　場　蒲郡市民会館
受講者　二十六名
講　師
・数学科
愛知教育大学 准教授
青山　和裕　先生
「主体的・対話的で深い学びを実現するための算数・数学科学習」
・総合的な学習の時間
豊橋市立富士見小学校 校長
羽生あゆみ　先生
「学習指導要領を踏まえて総合的な学習の時間の授業を創る」

【西三河】
○期　日　八月二十二日（木）
会　場　豊田市教職員会館
受講者　百一名
講　師
・道徳科
愛知教育大学大学院 非常勤講師
鈴木　健二　先生
「すべての子どもに夢と笑顔を～学級経営に生かす道徳教育の推進～」
・理科
豊田市立竜神中学校 校長
緒方　秀充　先生
「学ぶ楽しさを理科で！」
・体育科
岐阜聖徳学園大学 教授
玉置　崇　先生
「授業力を高めるための心得と方策」

本年度も魅力あふれる講師の先生方をお招きし、講座Ⅰでは、授業づくりに対する実践的な理論について熱心に学びました。講師の先生方の経験や実践に基づき、子どもの捉え方、子どもの意識や思考を見通した単元構想の仕方、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の視点などについて教えていただきました。二学期の授業に向けて、自分の授業を見直したり、学んだことを自校で伝えたりしていこうとする気持ちを高める受講者の姿や感想が多くありました。

授業づくりの意見交流をする

受講者の声

・いかに子どもたちに「火をつける」か。今まで自分が実践してきて、子どもたちが課題を見つけ調べていたなと思っていましたが、本当に知りたくてやってきたことなのかと振り返りました。学びに火をつける三つのステップを意識して単元を組んでいきたいと思いました。（総合）

・安心感のある学級の基盤としての道徳というお考えに感銘を受けました。私の授業は、この内容について考えさせたいという思いが先行してしまい、子どもたちが日常生活で意識が変わるきっかけとなるような支援をあまりしてなかったのだと考えさせられました。子どもたちが安心して学校生活を送れるよう、小さな道徳や一時間の授業を考えたいです。（道徳）

・授業で教材を扱うときに、見せ方一つで違ってきたり、失敗例や未完成のものからスタートすることで子どもたちの思考力を高めたり、対話を増やしたりすることにつながるのだと感じました。学ぶことの楽しさを、子どもたちが理科の授業を通して感じられるように、今日の講座から教わったことを生かして取り組んでいきたいです。（理科）

授業力養成講座Ⅱ（秋期講座）

【東三河】
○期　日　十月二十一日（月）
会　場　蒲郡市立形原北小学校
受講者　十五名
講　師　羽生あゆみ　先生
授業者　今西　良伸　先生
五年　総合的な学習の時間
○期　日　十月三十一日（木）
会　場　蒲郡市立塩津中学校
受講者　九名
講　師　青山　和裕　先生
授業者　石原　佳奈　先生
一年　数学科

【西三河】
○期　日　十月　一日（火）
会　場　豊田市立若園中学校
受講者　二十二名
講　師　緒方　秀充　先生
授業者　石川　和貴　先生
一年　理科
○期　日　十月　八日（火）
会　場　みよし市立黒笹小学校
受講者　二十七名
講　師　玉置　崇　先生
授業者　入江　啓太　先生
五年　体育科
○期　日　十一月　六日（水）
会　場　豊田市立東広瀬小学校
受講者　四十八名
講　師　鈴木　健二　先生
授業者　大橋　優輝　先生
六年　道徳科

講座Ⅱでは、どの授業においても、子どもたちの問題意識や考えをもとにした授業展開、子どもたちの主体的な学習を支える教師支援が講じられており、切実感をもって問題に向き合ったり、積極的に意見を伝え合ったりする子どもたちの姿がありました。講師の先生方にファシリテーターを務めていただいた授業協議会では、子どもの発言や授業動画に基づいて授業を分析し、教師支援の在り方やタイミングなどについて、熱心に意見を交わし、学びを深めました。

子どもの視点で教材を見合う

受講者の声

・意欲をもって粘り強く問題に取り組める生徒を育てるには、自分の意見をもつこと、多様な考えを認め合いながら自分の考えを深めていくことが大切だと学びました。授業者の生徒への関わり方、意見の引き出し方や、協議会での先生方の意見、青山先生のご指導から考えさせられた生徒への関わり方を授業づくりに役立てていきたいです。（数学）

・子どもたちがどのように自己の課題を見つけ、チームの課題として練習などに反映させていくのか、教師の出としてどのように前時の振り返りを生かしていくのかなどを学ぶことができました。また、今後の授業展開や、どんな力を子どもたちに身につけていけばよいかを考えるきっかけになりました。（体育）

・鈴木先生の四つのポイントの提案を自分自身が率先して授業に取り入れて、若手の先生方に参観してもらいます。そうすることで、「自分にもできそう」と思ってもらい、道徳の授業づくりを広めていきます。また、今回の再現性の高い指導案も、授業の組み立て方に不安をもっている先生方に多くのヒントを与えるものだと思います。（道徳）

教育随想（96）

特別支援教育は教育の原点か

高浜市教育委員会
教育長
岡本　竜生

もう二十五年も前のことですが、附属特別支援学校に勤務する機会がありました。それまで中学校勤務しかなかった私にとって、子どもたちとの日々のかかわり方からして苦戦の連続でした。そして、日々の授業もままならないうちに、春実践の研究用授業を考えなければならないときがきたのです。当時のスタイルは研究対象児を一人決めて、その子の学びの伸びを中心に検証していくやり方でした。とはいえ、学級には研究対象児でない子どもたちもいるわけで、その子たちの活動や学びも真剣に考えないと、いわゆる学級としてのまとまりのある授業にならず、本末転倒のまったくお粗末なものになってしまいます。

研究対象児のできることや伸びる芽が何なのか把握するだけでも大変でしたが、様々な個性をもった子どもたちが、一緒にやれる活動を考えるのがまた難しいことでした。子どもたちがそれぞれの課題を個別に取り組むような活動は、附属特別支援学校の授業として認められていませんでした。心に残っている先輩の言葉があります。「楽しくなければ授業じゃない。楽しいだけでも授業じゃない」というものです。今ではこの言葉も納得できますが、当時は、楽しい授業だけで勘弁してほしいという心境でした。それにしても、私が一番悩んだのは研究対象児の活動や学びを考えることというより、雲梯の上をバランスをとって歩くことが好きなAさんでした。Aさんは基本的に一人でいることが好きで、こちらから誘う遊びにはほとんど関心がありませんでした。どうしたらみんなと一緒の活動をしてくれるのかという思いでした。

あるとき、Aさんがいつものように紙を縦に器用に破って、Aさんのルールに従って手早く折り目を付けて、片手でひらひらさせながら遊んでいました。その様子を見ていた私は、初めてこれはいけるかもという感覚になりました。Aさんが片手でひらひらさせているものを釣り竿として見立てて、魚釣りゲームをしてみんなで楽しめないかという発想でした。それにしてもここに至るまでにどれだけの試行錯誤を繰り返したことか。研究対象児の好きなサメを含め、大小様々なたくさんの魚を手作りして、口の部分に鉄片を取り付けました。そしてこれまた手作りの竿の糸の先に磁石を取り付けました。みんなが魚釣りゲームで遊ぶ様子を見たAさんは、同じように魚を釣り上げました。子どもたちの学びに関しては、魚を釣った後にその魚をお店で売るという活動の中で準備しました。

もうひとつ、学芸会の題材や内容を考えるときの先輩の言葉を思い出します。それは「一番障がいの重い子、一番できることの少ない子のことを第一に考えること」です。これもなるほどその通りでした。特別支援教育は個の徹底した理解から始めるので、方法論で考えると様々な形となり、教育の原点というにはいささかの違和感があります。しかし、まずは子どもを人として尊重すること、その子にとって自分にできることはないか徹底して考え抜くという愛情をもつ点においては、まぎれもなくそこに教育の原点があると今でも信じています。

編集後記

先生が笑顔でいると、子どもたちも自然と笑顔になりやすくなります。これは「ミラーニューロン」と呼ばれる神経細胞の働きによるもので、他人の感情や行動を模倣する役割をもっているようです。この一年間、私はみんなの前で、笑顔でいられただろうか、本年度も振り返りの時期が近づいてきました。

ここに令和六年度の最終号をお届けいたします。この一年間、貴重な原稿をお寄せいただきました皆様には、心よりお礼申し上げます。また、「教育みかわ」をご愛読くださった皆様、本当にありがとうございました。

皆様にとって読みやすく、教職員のさらなる力量の向上につながる会報誌となるよう、一層の充実を心がけて取り組んでまいります。

表紙の写真

『わたくり』

撮影　西尾市立福地南部小学校
高木　善隆 先生